グレナディンのグラス

これからする話を聞いてほしいんだ。

ホテル「黄金の都プラハ」で働きはじめた時のこと、支配人がわたしの左耳をつかみ、引っ張りながら言った。「まだお前はここじゃ給仕見習いだから、よく心得ておくんだ！　お前は何も見ないし、何も耳にしない、と！　繰り返し言ってみろ！」お店では何も見ないし、何も耳にしない、とわたしは言った。すると今度は右耳を引っ張り、こう言ったんだ。「でも胸に刻んでおくんだ。お前はありとあらゆるものを見なきゃならないし、ありとあらゆるものに耳を傾けなきゃならない。繰り返し言ってみろ」わたしは呆気に取られたまま、ありとあらゆるものを見なきゃならないし、ありとあらゆるものに耳を傾けなきゃならない、と繰り返してから仕事をはじめた。毎朝六時になると全員がレストランで整列をする。支配人が到着し、カーペットの一方に給仕長、給仕の面々、そして一番端に給仕見習いの背の低いわたしが並び、反対側には料理人、客室係、調理補助、配膳係が整列する。支配人はわたしたちの前を歩きながら、胸当てや燕尾服の襟に汚れはないか、燕尾服にしみはついていないか、ボタンは外れていないか、靴はきれいに磨かれているかを見て回り、足はきちんと洗ってあるか、匂いをかごうとして身を屈める。確認が一通り終わると、「おはよう、

紳士諸君、おはよう、淑女の皆さん……」と言葉を発する。それ以降、誰一人として声を出してはならないのだ。給仕たちはフォークやナイフをナプキンで包む手順を教えてくれた。ほかにも、灰皿を掃除するだけでなく、毎日、熱々のソーセージ用の金属製の容器をきれいにしておかなければならなかった。どうしてソーセージかというと、駅でレストランのソーセージを売っていたからで、手順を教えてくれたのは給仕見習いを卒業したばかりの給仕人だった。彼はもう給仕の仕事をこなしていたが、いまだにソーセージを運ばせてくれと頼み込んでいた！　せっかく給仕になれたのに変なことを頼むなと思っていたが、しばらくして彼の気持ちがわかるようになった。わたしも列車が来るたびに熱々のソーセージを運ぶこと以外のことはやりたくなくなり、来る日も来る日もソーセージとパンを一コルナ八十ハレーシュで売りまくった。旅行客は二十コルナ紙幣しか持っていなかったり、場合によっては五十コルナ札しか手持ちがなかったりする。そういう時、本当は小銭があっても釣り銭がない振りをし続けていると、旅行客は列車に飛び乗り、何とか窓際まで近づいて窓にしがみついて手を出す。わたしはまず熱々のソーセージのケースを下に置いて、ポケットの中にある小銭をジャラジャラ鳴らす。すると旅行客は、もう小銭はいいから、大きな札だけ返してくれと叫びはじめ、わたしはゆっくりとポケットの中の紙幣をまさぐる。そうこうしているうちに駅員が発車を知らせる笛を鳴らす。わたしは紙幣を取り出そうとするが列車は動きはじめてしまい、わたしも列車にあわせて走り出すのだが、列車のスピードは徐々に上がっていき、手を上げて紙幣を差し出すものの、旅行客の指に触れるかどうかといった具合で、ある人などはあまりにも身を乗り出していたので車内にいた人が足を押さえなければならないほどだった。頭が庇にぶつかったり、信号機の柱をかすめることもあった。とはいえ、いつも指はあっという間に遠ざかり、わたしはお札を握った手を伸ばしたままゼーハーゼーハーしながら立ちつくすばかりだった。おつりのために

わざわざ戻ってくる旅行客などほとんどいなかったのでお札は自分のものになり、そうやってすこしずつお金が貯まっていき、一か月後には数百コルナに、やがて千コルナになった。でも毎日、朝の六時と就寝前に支配人が足を洗っているか確認にやってきて、十二時にはベッドに入っていなければならないという生活は変わらなかった。こうしてわたしは自分の周りのあらゆることを耳にせず、けれどもあらゆることに耳を傾け、あらゆることを見ず、けれどもあらゆることを目にするようになったのだった。そしてわたしはここの規律と規則を目の当たりにした。支配人は従業員の仲が悪くなると大喜びし、レジの女の子が給仕と映画にでも行こうものなら、すぐに解雇した。またわたしは厨房の中のテーブルに陣取る常連客のことも知るようになった。常連客たちのグラスにはそれぞれ自分の番号と印があって、鹿のグラスやスミレのグラス、街の風景が描かれたグラス、角ばったグラス、胴がふくらんだグラス、ミュンヘンから持って来たＨＢ（ドイツビールの銘柄ホフブロイ Hofbräu の略号）の印の付いている石のジョッキなどがあり、わたしはそのグラスをすべてきれいに洗っておかなければならなかった。こういった具合で、毎晩、選りすぐりの人たちがやってきた。公証人、駅長、裁判長、獣医、音楽学校の校長、工場長のイーナ。コートを脱いでからコートを羽織るまで、お客全員のあらゆる手伝いをし、ビールを運ぶ時はかならずそのグラスの持ち主に手渡さなければならなかった。驚いたのは、裕福な人たちが、昔、町のはずれに歩道橋があったとか、その歩道橋の脇にはポプラの木が一本、三十年前にあったはずだ、などといったたわいもない話題で一晩中楽しんでいたことだ。「いや、あそこには歩道橋なんてなくて、ポプラの木しかなかったはずだ」と誰かが言うと、別の人が答える。「いやいや、ポプラの木も、歩道橋もなくて、あったのは手すりと板切れだけだったはずだ……」そうこうしながらこの話題でビールを飲み干し、楽しみ、大声を上げ、罵倒したりしていたが、本心から罵倒しているわけではなかった。お互いテーブル越しに立ち上がり

声を張り上げて、一方が「あそこにあったのは歩道橋で、ポプラなんかじゃないよ」と言ったかと思うと、反対側から「いや、あそこにあったのはポプラで、歩道橋ではなかった」と声が上がり、でもすぐにまた座って、すべてが元の鞘に収まっている。そう、大声を張り上げるのは、ビールを美味しく飲むためだったのだ。またある時などは、どこのビールがチェコで一番かで言い争いになり、一人はプロチヴィーンと言い、二人目はヴォドニャヌィに一票を投じ、三人目はプルゼンだと言い、四人目はヌィンブルク、そしてクルショヴィツェだと言い合って声を張り上げていたが、誰もがお互いのことが好きだった。声を出していたのは何か面白いことをするため、夜のこの時間をどうにかつぶすためだった……。駅長にビールを渡そうとすると、駅長はすこし前屈みになって「獣医さんを『天国館』の女の子たちのところで見かけたよ、ヤルシュカという娘の部屋だよ」とわたしの耳元で囁いたかと思うと、校長もまた「獣医さんがあそこに行っていたのは事実だが、木曜じゃなく、水曜日だったはず、ヤルシュカではなくヴラスタと一緒だったんだよ」と囁く、といった具合に「天国館」の女の子たちをネタに夜を満喫する。誰が行ったことがあって誰が行ったことがないとかは、わたしにしてみればどうでもいいことだった。町はずれにポプラと歩道橋があろうと、ポプラはなくて歩道橋だけだろうと、あるいはポプラだけだろうと、はたまたブラニークのビールがプロチヴィーンのビールよりすぐれていようといまいと、わたしは何も見たくなかったし、何も耳にしたくはなかった。ただ実際に見たい、聞きたいと思ったのは「天国館」のことだけだった。有り金を数えてみると、熱々のソーセージを売ってお金を貯めていたおかげで、すぐにも「天国館」に行ける状況だった。そればかりか、わたしは駅で涙を流してお金を得る術も知っていた。というのも、わたしは背の低い小さな給仕見習いだったので、お客が手を振って呼び寄せ、勝手に孤児だと思い込んでお金を渡してくれることもあったからだ……。

ある日、夜十一時過ぎに足をきれいに洗って、部屋の窓から抜け出し、「天国館」の様子を見に行く計画を立てた。その一日は「黄金の都プラハ」で荒々しく幕を開けた。昼前にジプシーの集団がやってきたのだが、かれらはきれいな身なりをしていたので鋳掛(いか)け屋だったのだろう、お金も持っていた。テーブルに着くと、高級な料理ばかりを注文し、何か注文するたびにお金を見せびらかした。ジプシーたちが声を上げはじめたので、窓際で本を読んでいた音楽学校の校長はレストランの中央に移動したが、そこでも本を読み続けていた。とてつもなく興味をそそる本であったようで、校長は三つ先のテーブルに移動しようと腰を上げた時ですら本から目を離さず、腰を下ろす時も視線は本に落としたままで椅子を手探りで探し当てていた。常連客のグラスを磨いていたわたしはグラスを光に透かしてみた。まだ昼前の時間で、何人かの客がスープやグラーシュを頼んでいるだけだった。給仕はやることがなくても何かをしていなければならないので、わたしがやっているようにグラスを丁寧にきれいに磨いたりし、給仕長は立ったまま食器棚のフォークをまっすぐにならべ、別の給仕はテーブルのナイフやフォークなどを整えたりしていた。「黄金の都プラハ」と刻まれたグラスを透かして見ていると、いらだった様子のジプシーたちが窓の下を走り過ぎていくのが目に入った。かれらはわが「黄金の都プラハ」に入ってきたかと思うと、廊下ですでにナイフを取り出していたらしく、それはもう恐ろしい光景だったのだが、鋳掛け屋のジプシーたちに駆け寄ろうとした。すでに中にいたジプシーたちは待ってましたと言わんばかりに飛び上がり、ナイフが届かないようにと盾にしたテーブルを引きずりながら、後ずさった。だがすでに二人が床に倒れていて、お尻にはナイフが突き刺さっている。ナイフを持ったジプシーたちは刺そうとするばかりか、手に切りつけたりし、おかげでテーブルは血だらけになっていたが、音楽学校の校長はあいかわらず本を読んでいて、時折笑みすら浮かべていた。ジプシーたちの突風は校長の周りというよりも頭上を